

中国語環境児童に対する日本語指導

聴覚障害児教育の日本語指導の可能性を探る

前上海日本人学校浦東校 教諭

筑波大学附属聴覚特別支援学校 小学部 教諭 佐 渡 雅 人

キーワード：在外教育施設、上海、日本語教育、聴覚障害児に対する日本語指導法

1 はじめに

本報告は、筆者が長年実践して得られた日本語指導法を、赴任した日本人学校の通常学級に通う日本国籍の児童と、日本国籍ではあるが家庭のコミュニケーション環境が中国語である（つまり日本語が第2外国語であるケース）児童に対して行い、聴覚障害児に対する日本語指導法の有効性（以下 日本語指導法）と問題点を探ったものである。

2 上海日本人学校浦東校の沿革

- ・1975年（昭和50年） 上海総領事館の一室を借りて「上海補習校」として児童生徒数7名で開設
- ・1979年 全日制に準ずる授業を開始
- ・1987年（昭和62年） 上海日本人学校として児童生徒数61名で開校
- ・2006年（平成18年度） 児童生徒数の上昇（2100名を超える）により、虹橋校と浦東校（小学部362名、中学部450名）に分かれる。
- ・2016年度4月現在、小学部672名（25学級）、中学部466名（17学級）、特別支援学級を含めて1138名が在籍（保護者の勤務の都合で年度内にかなり人数の編入学・転出がある）。



上海日本人学校浦東校 10周年記念写真（2015年度）



上海市内の現地校との交流活動の様子

3 研究について（学校研究と個人研究）

（1）学校研究

2015年度（平成27年度）より全学部研究として道徳科の指導を通じて言語能力の育成を目指し、全校指定授業を各学年1本（合計9本）行った。

その結果、

- ①児童生徒に対して日本人が考える道徳的な素養を体得させるためには、現地校との交流や校外学習の中で実践

的に考えていく方法をとることが望ましい。

②道徳科の話題設定や展開・ICT（Information & Communication Technology）の活用などについて、

- ・小学校低学年では心情理解のために役割演技やふきだしの利用が望ましい。
- ・中学年ではグループワークなどの話し合い活動が大切。
- ・高学年と中学部ではワークシートの活用が必要。

という知見が得られた。

（2）個人研究

上海に赴任するに際し設定したテーマは、

- ①附属校でも実施しているNRT（Norm Referenced Test）学力テストの本校と上海の児童の結果の分析
 - ②聾教育の言葉の指導を取り入れた実践（口声模倣、理解の確認の方法、語彙の拡充など）による、一般校児童の言葉の力の伸び（全体、インター校出身者、中国語環境）・読み取りテストの実施と分析
 - ③保護者アンケートの実施と結果分析
 - ④中国江蘇省（寧波市）、上海市内の特殊教育センター・聾学校の見学と交流（授業の実施）
 - ⑤筑波大学上海教育研究センターとの情報交換・研究授業の実施
- というものであった。

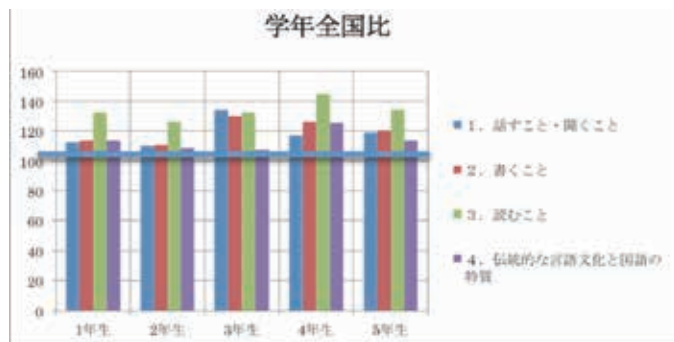
今回は①②③について報告する。

4 研究報告

（1）上海日本人学校浦東校児童の学力について

浦東校では私が赴任する前年度の2013年度よりNRT学力検査を実施している。

図1 浦東校児童のNRT国語成績（全国との比較）



図は浦東校の成績を全国と比較したもので、100（線で示す）を全国水準として表している。

NRT 学力検査の結果から明らかになった事は、

- ・各学年それぞれぞれの全国比（平均を100とする）をみると、「読む」領域が各学年100 < 120と全国の成績を大きく上回る。
- ・「話す・聞く」「書く」「言語事項」での各領域の結果からは、低学年では全国との差が110前後となっているが、中学年以降では120前後と成績を伸ばしている。
- ・NRTの5段階評価の結果からは、各学年評価段階4以上（偏差値55以上）の児童が60%を超えており、評価段階3（偏差値45～54）が30%と90%の児童が概ね日本語を理解できているということがわかった。しかし、評価段階1、2（偏差値44以下）の児童も少数ではあるが10%存在していた。調べてみると、この10%の中に、日本人学校に通学し日本語をある程度解するものの、日本語の「国語」としての力に課題をもつ中国語環境（家庭では中国で会話しているケース）の児童が多く含まれている。

ということであった。

日本人学校に通学できる日本語会話力はあるものの、日本語の学力「国語」の力については課題を抱えている

中国語環境の児童への支援の必要性が明らかになった。

(2) 聴覚特別支援学校での日本語指導を取り入れた教科指導の実践とその結果

日本人学校浦東校では小学校低学年(平成26年度1年生、27年度3年生、28年度1年生)の学級担任として児童の指導にあたった。表1で示す通り、2014年度に担当した小1のクラスには中国語環境児が2名在籍し、指導の結果NRT検査の国語の偏差値が51と63(クラス平均57)であった。2015年度には1年生時にNRT検査の国語の読解の領域で苦戦していた中国語環境児(右下の表2013年度1年生)を3年生で担当し、一斉指導の中ではあるが日本語指導を行った。以下は、その実践指導例である。

	担当学年	最終人数	中国語環境	在籍比率
2014年度	1年生	27名	2名(1名)	7%
2015年度	3年生	30名	6名(4名)	20%

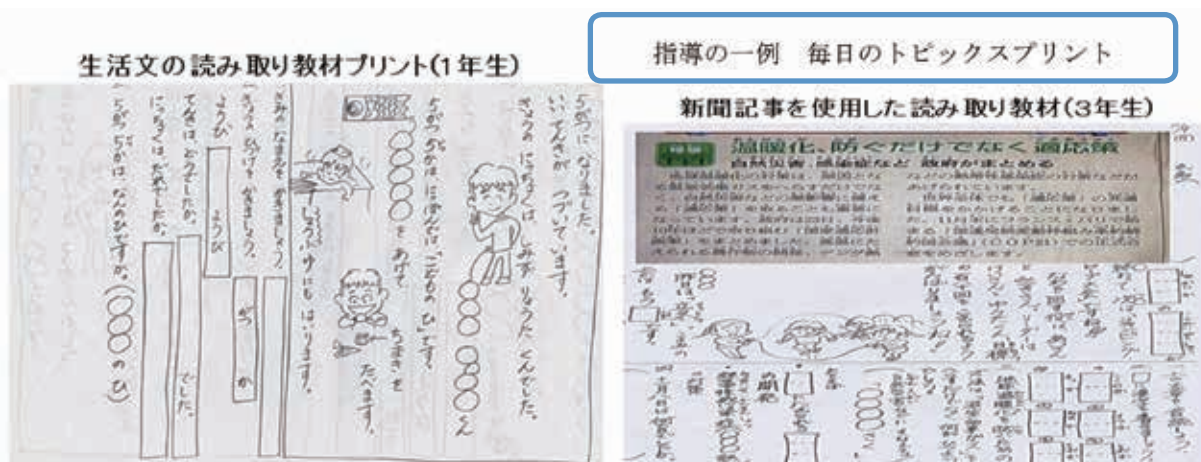
表1 浦東校で筆者が担任した児童数と中国語環境の児童の数

	話す/聞く	書く	読む	言語事項
2013年度	53.8	55.2	16.6	73.2
2014年度	78.0	88.5	96.0	71.0
差	+24.2	+33.2	+79.6	-2.2

表2 2014年度筆者が指導した小学部1年中国語環境児の偏差値
2013年度小学部1年時の中国語環境児の偏差値との比較

①指導例1 トピックス

1年生ではその日の行事やクラスの出来事を文章でまとめた生活文を、3年生では生活文に加えて、新聞記事を取り入れた文章を作成し、朝の会で提示して質問応答を通してやりとりや話し方、5W1H(When・Where・Who・What・How・Why)を中心に読解の練習を行った。



②指導例2 朝の会

日直は通常2名で行うが、1名で責任をもって行わせた。1年生では項目だけでなく、提示する文章も常に目につくよう視覚的に配慮した。また、日直は「今日の一言」として「いつ、どこで、だれと、何をした、感想」という報告を行い、クラスみんなからの質問に答えさせるようにした。帰りの会では、生活目標のチェックや良いところ探しをさせるなど、担当した1日を日直が全体をよく観察し、話す機会を増やすよう配慮した。

③指導例3 緊急学級会

問題(子どもからの「困っている」「ひどいと思う」「何とかしてほしい」などの訴え)がある場合、「どこがいけないのか」「どうしたらよいか」について、徹底的に話し合わせた。司会の日直は、話し合いの際の観点をまとめたり、意見整理をしたりする役割を担わせた。

④指導例4 連絡帳の活用

トピックスで扱う「例えば こどもの日ならば～端午の節句・カブト・菖蒲湯・柏餅・鯉のぼり・矢車など」内容について板書し、連絡帳に書かせた。話し合って理解した文章や言葉なので、同じ内容のプリントを出して

も家庭でわからないということがあった。保護者にも学校でどのような内容が扱われたかわかるように配慮した。

⑤日本語指導法を行った結果

通常学級に在籍する中国語環境児童の様子

aの結果から、2013年度に小1であった中国語環境児が特に国語の「読む」領域で苦戦していることがNRT学力検査の結果から分かったため、彼らが3年生の時に希望して1年間担任し、日本語指導を試みた。また、クラスには中国語環境児童と上海のインターナショナル幼稚園を終了した児童を他のクラスよりも多く入れてもらうよう要望した。

結果としては表2で示すとおり、学年を経る毎にテストの難易度は高くなり、正答率や偏差値を維持することが難しくはなるが、それに近い数値や前年度まで日本語で苦勞していた児童（F児）が偏差値で20も成績を上げたケースも見られた。

	2年		3年	4年	5年	NRT 偏差値	
	前期	後期				2年生	3年生
C	85%	32%	40%	35%		36	42
D		85%	67.5%	57%		45	43
E	92%	55%	65%	13%		40	40
F			82.5%	65%	66%	33	53
G			70%	49%		54	48
H			95%	70%	76%	59	62
学級平均			81.6%	71.6%		55	58

・上記の6名はいずれも幼稚園段階を上海で暮らし、両親のどちらかが中国語会話者（中国人）であることから家庭での会話は日本語と中国語が入り交じったものであろうことが予想される。C児をのぞいた5名がほぼ正答率70%近くからそれ以上の成績をおさめた。C児もテストでの結果は2年生前半レベルではあるが、学習言語への移行が可能となる「9歳の壁」の手前まで日本語力が伸びていると言える。

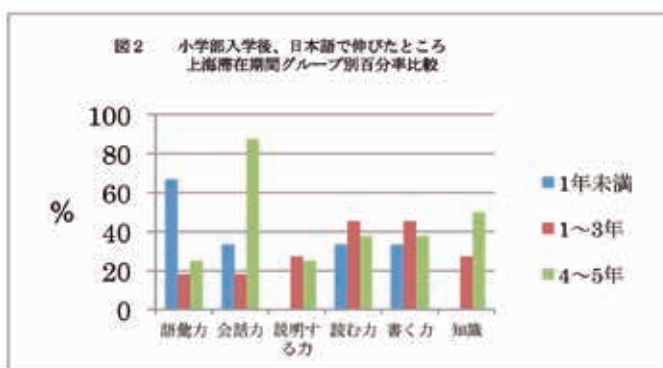
・F児はご両親が中国出身者で2年生まで日本語力で苦勞していたが（NRT偏差値33）、1年間で20も偏差値を上げた。元々能力が高かったとも思われるが、やり方によって改善され、日本語を母語とする児童に匹敵する力をつけられるということである。

表3 中国語環境児童の読み取り検査（3年3学期実施）とNRT学力検査の結果（4年1学期）

⑥保護者アンケートから

上海に赴任するに際し、保護者が日本語の発達に関して家庭で最も配慮した項目は「本の読み聞かせ」であった。2番目は「会話（話をよく聞いてあげる）」というものであった。日本語社会から切り離される子どもたちにとって、日本語発達のために何もしなくても大丈夫であると考えている家庭はなく、やはり何らかの配慮が必要と考えていることが推察される。しかし、具体的に自分がどのような配慮をすればよいのかという点で不安を多く抱えての赴任であった事が推察された。

上海に滞在期間が長期になるケースは中国語環境家庭が多いが、「本の読み聞かせ」だけでなく、ひらがな・カタカナの学習や日記を書かせたり、小学校に入学する前から積極的に読み書きの学習を進めていた。また、日本のTVやDVDを見せて日本語に慣れさせようとしていることもわかった。



赴任1年未満では「語彙力の伸び」
 赴任2～3年では「読解」「書記表現」
 赴任4年以上では「会話力の伸び」
 という面での効果が見られたとした答えが多かった。

小学校入学時に中国語環境にあり日本語の力をつけることが難しかった児童には、聴覚障害児教育の口声模倣・語彙の拡充・理解の確認をはじめとする日本語指導法は有効であり、さらに日本で幼少期を過ごした児童にもかなり言語的な発達や刺激を与えることが可能であることが分かった。保護者からのアンケートからは、「木枯らし」「春一番」など季節や行事の日本語や、新聞からの話題など会話が広がったという感謝の意見を多く頂いた。

5 おわりに

3年間のこれらの経験は自分の自信にもなったが、もっと海外の子ども達にとって日本語を身につけるためのより良い支援の方法を見つけ出す必要性も感じた。私の今後の目標が見つかる事ができたという点でも有意義な時間であった。このような経験をさせてもらえた筑波大学教育局、附属聴覚特別支援学校の同僚に深く感謝している。